

漢法苞徳塾資料	No. 259
区分	論説
タイトル	二つの生命観について
著者	八木素萌
作成日	92年夏期合宿塾長講話

◎二つの医学の問題に関連して考えさせられた事

☆塾の夏期合宿についてあれこれと考えていた頃に（6月中旬だったと思う）札幌の麻生病院（脳神経外科病院）ではナースたちが、チームを組んで植物人間の看護にチャレンジした、患者は植物人間から回復してリハビリテーションに入ったという映像が、NHK-TVで放映された。患者の応答を引き出そうと、家族の協力も得て、様々にコミュニケーションを試み続けたと言うのである。言わば常識を超えた努力の成功である。人の命とその存在と、そして治療や看護と言うものを深く考えさせる衝撃であった。

☆アメリカでのトリプトファン事件について……バイオ食品に対する規制の問題にからんで

昭和電工が1回の突然変異誘発と4回の遺伝子組み替え操作で作られたトリプトファン生産菌を用いて作った健康食品で、「米国での被害者1510人うち死者38人、ドイツ・フランスなど欧州での患者約100人、日本でも10人前後の患者がいると見られる」事件を引き起こした。「腕や足などから激しい痛みが起こり、赤く腫れ、同時に血液中の好酸球が異常に増える」好酸球増加・筋肉痛症候群（EMS）の発症事件で、81年にスペインで起きた油症に良く似た症候であり、原因物質として2種類が判明したが毒性が明らかな方の「フェニルアミノアラニン」は、スペイン油症の原因物質の1つの「フェニルアミノ・プロバンジオール」に近い化学構造で、これは「多量のトリプトファンとの相乗作用の公算がある」と言う。

『科学朝日・9月号』の記事編集者は「作為的に突然変異や組み換えを起こした菌は、目的とする機能以外の部分でも変異や障害を起こしている可能性がある。その結果、特異な物質を生産する懸念があり、…」と記述している。

☆『科学朝日・9月号』には「ナノテク・ライフ20XX年」と言う特集が組まれている。ナノメートル単位（10億分の1メートル＝ウイルス100ナノ、たんぱく質10ナノ、DNA二重らせんの直径1ナノ、原子0.1ナノ）のテクノロジーに、手放しの夢想的な楽観をもとにした未来構想を展開した、K・E・ドレクスラーの『創造する機械』の主張を検討する特集である。分子アSEMBラー（極微コンピュータ内蔵・自動・自走でナノ単位の仕事をする）が障害されたたんぱく質を修復したりDNAやRNAを組み替えたりすると言うのであるが、九大助教授・吉岡 斉（科学史・科学社会学）は専門の立場から、K・E・ドレクスラーに峻烈な批判を加えている。

☆『セル・6月25日号』の記事では「人などで免疫システムの多様性をつくるのに重要な遺伝子と同じものがショウジョウバエにあることがわかった。……意外なことに、この遺伝子からつくられるたんぱく質は、神経系の発生と関連しており、その関係と起源が改めて問われている。……京都大学医学部の古川 貴久らは、ショウジョウバエでも、この免疫グロブリンの組み換え認識配列結合たんぱく質と同じものがあることを発見した。その遺伝子が染色体上でどこにあるかを調べたところ、既知のヘアレス遺伝子の抑制遺伝子（ヘアレス遺伝子に変異があっても、正常な表現型を示すようにする遺伝子）であることがわかった。……」というのである。

もともと皮膚と神経系は外胚葉系のものであるが、間葉系の免疫細胞・白血球が表皮のメラチノサイトで完全に成熟して、その機能を完遂できるようになるのであり、発生学的にはもっとも分化度が低いということもできるマクロファージとの緊密にコミュニケーションしながら、免疫機能を完遂して行くことは判明していたのであるから、「さもありません」とも言うこともできようが、神経系と免疫系が極めて緊密な調整関係にあるようだという事が、遺伝子レベルからも示唆されているものであろう。これは、札幌の麻生病院での成果と無関係であろうか？また『魔弾の効用を越えて』を書いたB・ディクソンが「難治」「不治」とされる病の場合には、メンタルな側面が非常に大きな意味を持っている事を示唆する例を、その著書に記述した事と、無関係であるのだろうか？

#### ☆ヒヒの肝臓を移植した事件に見られる医療思想の荒廃

最初は手術の成功により患者の肝機能は良好に働いていると報じられ、次いで、ヒヒの肝臓を用いたのは最適の選択であったと言う医療側の発言が報道され、やがて患者は全身的な臓器不全を起こして死亡した、然し、他種の臓器を移植したケースでは最長の生存であった、と報道された。術後に10数日しか生き無かったが、それは患者の延命であり、苦痛の解除または緩解となったか？経済的な負担は？他種の臓器を移植して本当に患者を十分に延命させ、十分に病苦を（心身も経済も）緩和させられると、医師たちは確信して行なった手術であったのか？現代医学の常識から言えば医師たちのチャレンジは「病苦の緩解と延命」にあったのだとは断じて言えない。むしろ「強力な新しい免疫抑制剤の効果を試みる為の格好なモデルが得られた」為のものであると言うべきである。従って、このような手術は医療の荒廃以外の何ものでも無い。故に、これはまた、報道の姿勢にも大きな荒廃が見られたものである。

☆こんな問題を考えている最中の8月24日の朝のニュースで、過去5年間に輸血事故による死者は約170名に及ぶことが明らかになったが、これは輸血中の白血球によって、患者の身体が攻撃されて死亡するに至ったものである。従って、今後は輸血を放射線で処理することによって、このような事故を防ぐようにすると言うのである。此の説明は適切で正しいものであろうか？私は甚だ疑問であると思う。血液型の適合か否かは、現在判明している全ての要素で調査されているのだろうか？A B O式・r h式を含めて血液型の様式は他にも数種類があって、現在分かっている全部の様式を通じて適合する血液型は、500億分の1、とも800億分の1とも言われると計算されているのに、輸血

時の適合調査は、全ての血液型様式に渡ってはいないのである。このような問題と、今回の厚生省の対策（放射線を照射して処理した血液を用いる）との関係を明確にすべきものであろう。何かうさん臭い感じが否めないのである。

しばしば薬品の有効性や副作用の問題では、驚くべき腐敗としか言いようがない事件が報道される。これらは、現代の深刻な問題～ビッグサイエンスが孕んでいる問題～と深く関わっているものと言えそうである。

### ◎二つの生命観～人間機械論の系譜とそのアンチテーゼ

☆科学技術が獲得して来たものは、宇宙・少なくとも地球の歴史が極めて長い時間と途方もない無駄を積み重ねてきた上での創造物としての「生命」に、その自然の幽久の時間が作用しているものにとって代われることをやれると思ってもよいのか？ こういう問が実は突き付けられている、そう考えるべき時代が、我々が生きて生活している時代ではなかろうか？ 「神に代われる所まで人は発達したのだ」と言う人々の立場と、そのような思想は自然に対する恐るべき傲慢さであるとする人々の立場と、この二つの二者択一が、今日に生きているもののテーマではなかろうか？ このように把らえると、ノーバート・ウィーナーが『神・人・悪魔』で突き付けた問題は、そのまま今迄引き継がれてきていることが、明瞭である。

☆この問題を「生命観」の問題として提起するならば、「人間機械論」の系譜と、それと異なる系譜（宇宙との同調・共鳴・合一の思想）と、この二つの系譜の何れを選択するか？ ということであろうが、ことは簡単なものではあるまい。様々な宗教や土着的医療やの生命観を、丹念に検討してゆく必要があるからである。私の手に負える問題ではないので、少なくとも東洋医学とその周辺の生命観の特質を、「人間機械論」と対照して見たいものである。

☆第二次世界大戦（太平洋戦争）敗戦の時期は、戦後の混乱からの復興を求めていたのであるが、庶民にとっては生き延びようとあがく他には有りえないナリフリ構わぬ苦闘の日々であったし、在来の価値が根底から覆る状況に、精神的にも思想的にも対応を迫られる時代であった。そんな時代に青春を送った世代に、大きな影響を与えた『人間の歴史』（イリン）ほかの本があった。それは、人間の大きな能力に対する手放しの賞賛の歌であった。

☆戦後の混乱のさ中に青春を送った世代に『人間の歴史』が大きな影響を与えることができたのは、「人間の知識と技術と能力が、気候を代え大河を堰き止めてダムを作り、流れを代え、砂漠を緑野にして行く、これらを可能にした。また、自らの歴史をも制御できるようになっている。」などを主張したことに由来している。

☆戦後の復興が終って、深刻な東西対戦や南北対立と、OPEC と中立同盟の動向の中に、産軍同盟・産軍複合・ビッグサイエンス・組織問題が浮び上がった。そういう中でコンピューターが帯びている意味の大きさも浮上した。

そんな時に「コンピューターの生みの親」とも言われたノーバート・ウィーナーが『神・人・悪魔』を世に問うた。つづいてモノーの『偶然と必然』、レヴィストロースの『構造人類学』や『人種と歴史』、などなど話題の書が注目された。所謂、時代思潮がまさに転換しようとする時期を示唆しているものであった。つまり、『人間の歴史』に見えるパラダイムに対して、かなり、深刻な疑問が感じられていたのである。

☆スターリン批判・中ソ論争と、それに関連している思想面でのマルキシズムの動揺があり、政治面では遂には後にソヴィエト連邦の崩壊に至るまで続いて行く動揺がある。マルキシズムの動揺は近代における思想らしい思想の動揺でもある。坂田モデル・坂田理論が、湯川・朝永と並んで現代物理学に極めて大きな意味をもった事は既に定まった評価であるが、この坂田の認識論はマルキシズムの唯物辨証法の方法に拠っているものであるのは周知のことである。

☆現代の物理学が確立される時に、「マルクス主義哲学」と言われた「唯物辨証法哲学の認識論」（或は唯物辨証理論の認識論）であるとされている「坂田の認識論」（または坂田理論）が、大きな方法的な領導性を示していたと言うことは興味深いことである。然し、認識論・認識方法論・研究方法論としての、坂田理論的な側面とは別に、思想としてのマルキシズムがイリソンの『人間の歴史』を生んだ事に見られるように、世界・自然の中での生命の位置とそこでの「ヒト」の位置・役割とを理解しようと言うときには、「神に代わる人類」「世界に君臨する支配者である人類」と言う観念に囚われた。また、「生命は蛋白質の存在様式である」と言う観念は、ワトソン・クリックの「二重らせん構造」な確立や、また「生命のセントラルドグマ」の確立から「分子生物学」などに至る研究の系譜と発達と言う文脈の中に、「人間機械論」を強力に支えた面が強いものであることも指摘されなければならない。

☆自然の「フラクタル構造」が注目され、それが「カタストロフ」と実は相補的な関係、あるいは、相対的な構造の関係に在ると言う見地が成立して来ているのであり、「フラクタルとカタストロフ」とは同時に論じられなければならない。つまり、それぞれは切り放して個別的なものと考えたと「フラクタル」も「カタストロフ」も正当には理解できなくなるのである。

湯浅恭男氏は、ニーダムの考えであると断わったうえ「東洋医学の考え方は心身相関的〈サイコソマティック〉で全体的〈ホリスティック〉である、と言っている。」と紹介している。東洋医学における医学観が、このように言えるのであれば、医学的な対照（東洋的な）の「ホリスティック」で「サイコソマティック」な構造は、「フラクタルとカタストロフ」の構造と、重なりあったものに見えるのである。